

1. ツヤツヤとした光沢のある葉っぱ

北大植物園には北海道の自生植物を中心に約 4000 種類の植物があり、春から秋まで様々な植物を楽しむことができます。色鮮やかな花に隠れがちではありますが、いろいろな形や厚さ・特徴のある葉を観察できるのも本園の魅力の一つです。植物園だより 2022 年度のシリーズ㉓では、園内で見られる植物のなかでも葉の特徴に注目して紹介していきます。

シリーズ初回は、ツヤツヤとした光沢のある葉っぱがテーマです。下に紹介する 3 種は、冬でも落葉せず緑の葉をつける常緑広葉樹で、落葉樹が葉を出していない早春でも見ることができます。植物の葉や茎の表面は、クチクラと呼ばれる膜で覆われていて、雨や乾燥、紫外線、病原菌や昆虫による食害から植物を守る重要な役割を果たしています。クチクラはワックス(蠟)を主成分とし、常緑樹の葉で良く発達しているため、葉の表面はツヤツヤと輝くように見えます。

① ハクサンシャクナゲ (*Rhododendron brachycarpum*)

ツツジ科のシャクナゲの仲間で、白山で発見されたのでこの名があります。葉は長楕円形で長さ 6~13 cm、表面は革質で濃緑色、裏面は毛が密生して淡褐色、縁はなめらかです。高さ 2m ほどになり、5 月末から 6 月頃に白色から薄いピンク色の花を咲かせます。おもに高山植物園で見ることができます。



② ソヨゴ (*Ilex pedunculosa*)

モチノキ科で、風が吹くと葉がそよぎ、葉がこすれる音がすることからこの名があります。葉は卵状楕円形で長さ 4~8 cm、表面は革質で濃緑色、裏面は淡緑色で、縁はなめらかですが波打っています。雄株と雌株があり、雌株しか実をつけません。6 月に白い花が咲きます。バラ園と自然林の間に、高さ約 5m の雄株があります。



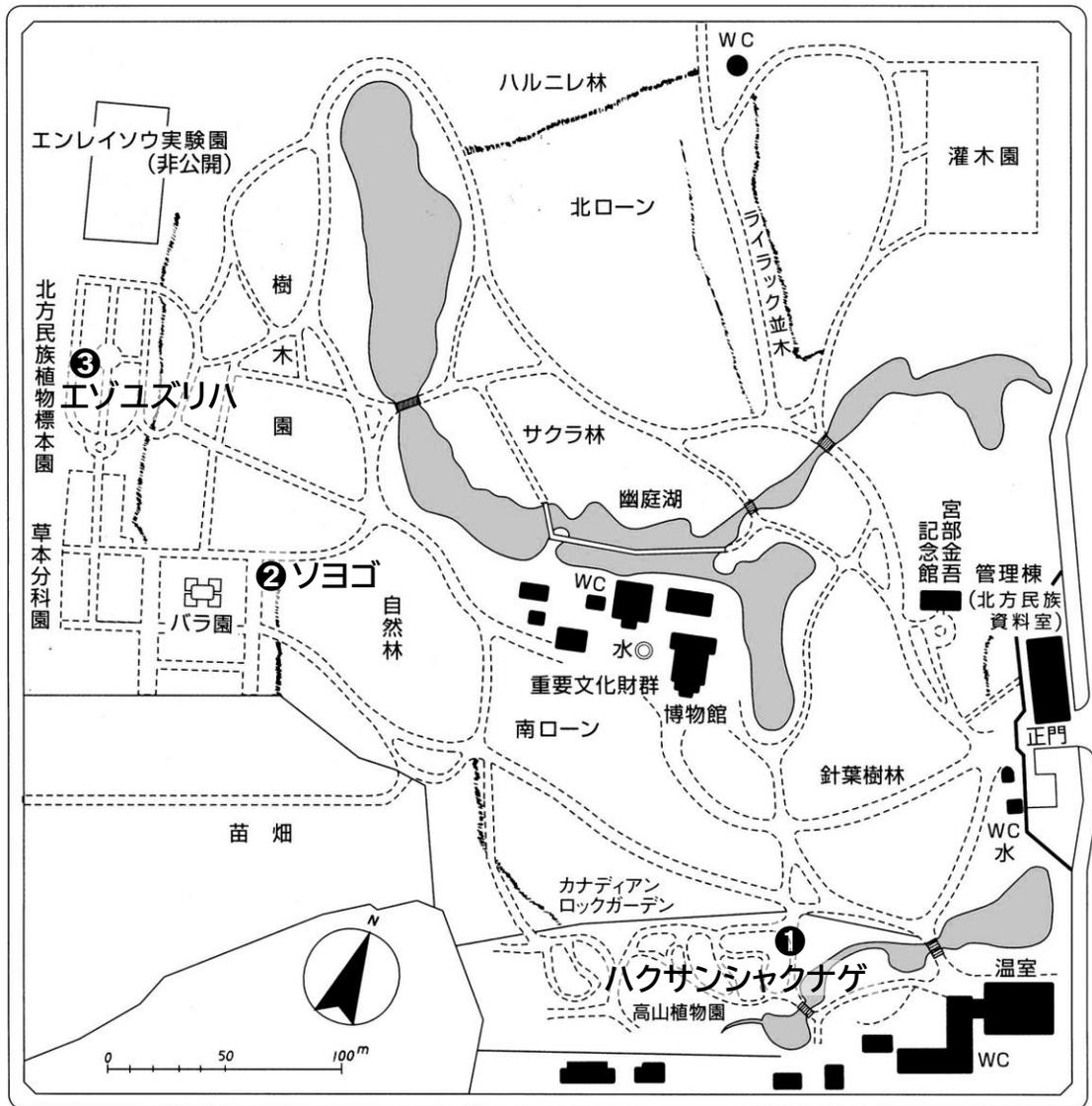
③ エゾユズリハ (*Daphniphyllum macropodum* subsp. *humile*)

ユズリハ科で、北海道に多く、春に新葉が出ると古い葉が落ちるのでこの名があります。葉は先のとがった長楕円形で、長さ 9~15 cm、表面は革質で濃緑色、裏面は緑白色、縁はなめらかです。高さ 2m ほどになります。北方民族植物標本園で見ることができ、アイヌの人々はこの葉を煙草にしたそうです。



いずれも名札(ラベル)が付いています。裏面の地図を頼りに、ぜひ探してみてください。

今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。



2. 大きな葉っぱ

植物園だより 2022 年度のシリーズ③では、園内で見られる植物のなかでも葉っぱの特徴に注目して紹介していきます。今回は、大きな葉っぱがテーマです。1 枚の葉の長さが 30 cm を超える 3 種を、葉が大きい順に紹介します。

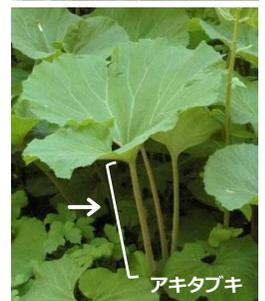
① ミズバショウ (*Lysichiton camtschatcensis*)

湿原に生える多年草で、春早く咲く花は北海道に春の到来を知らせてくれます。花が終わると地際から生える葉は、次々大きなものになり長さ 80 cm ~ 1m、幅 30 cm にもなります。サトイモ科で、大きな葉がバナナの仲間の芭蕉ばしゅうに似ており、水辺に生えることからこの名があります。湿生園で群落を見ることができます。



② アキタブキ (*Petasites japonicus* subsp. *giganteus*)

やや湿った山野の土手や道ばたに生えるキク科の多年草で、地際から生える葉は切れ込みのある円形で直径 80 cm 程度、縁は少しギザギザとしています。葉の柄てんか (写真の矢印部分) は長いもので 1~2m になります。春早く芽を吹く、「ふく」が転訛てんかしたなど、名前の由来はいくつか説があります。北方民族植物標本園で見ることができ、アイヌの人々も食用にしたほか、葉を傘のように使ったようです。

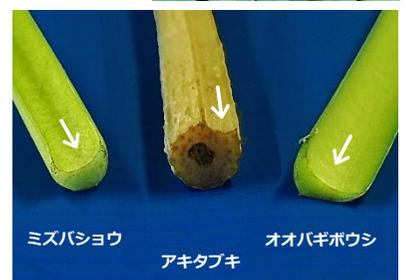


③ オオバギボウシ (*Hosta sieboldiana*)

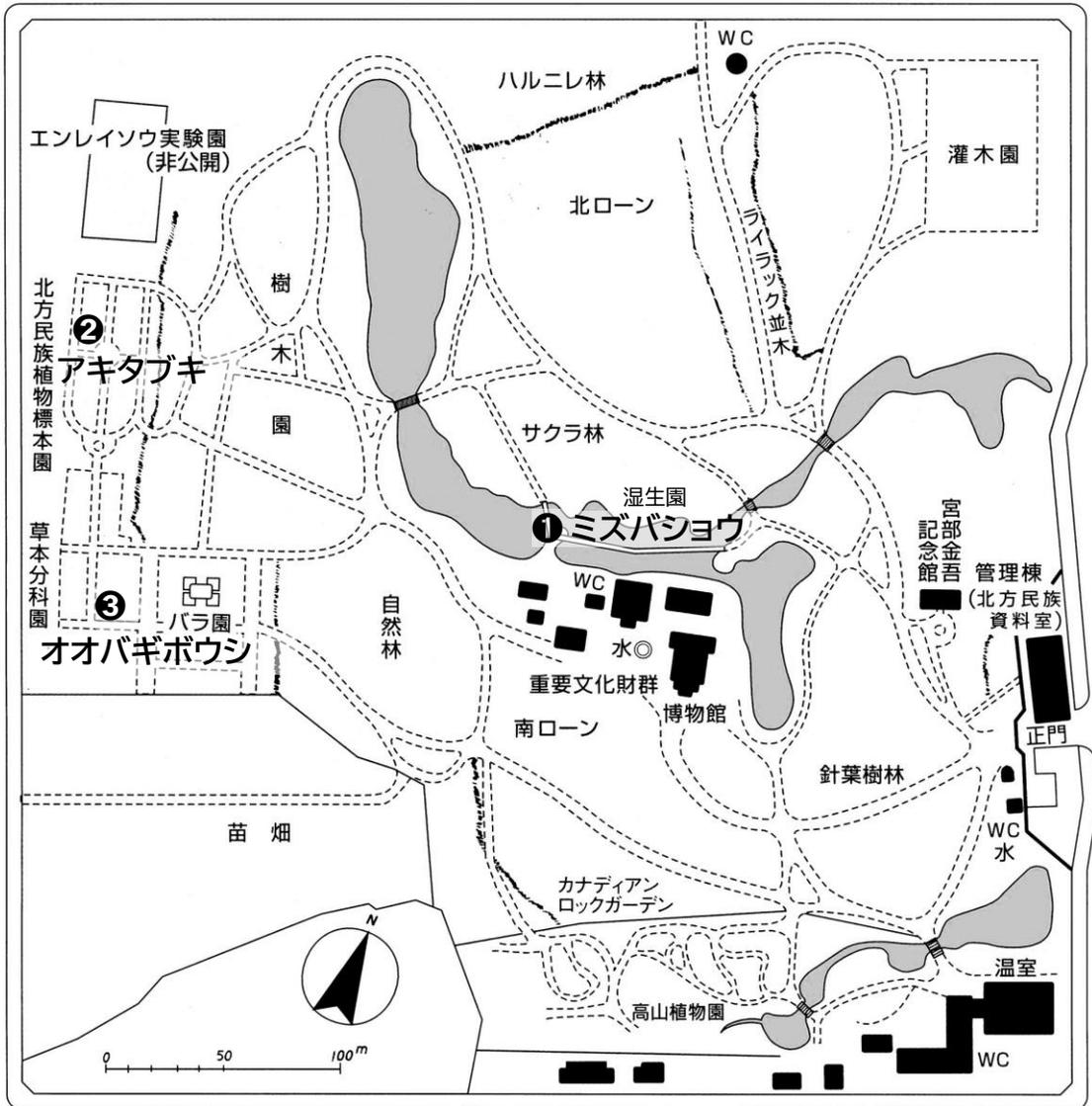
やや湿った草地に生える多年草で、地際から生える葉は青白く先のとがった卵形の楕円形で、長さ 30~40 cm、縁はなめらかです。クサスギカズラ科で、若いつぼみの形が橋の欄干につける擬宝珠ぎぼしに似て、葉が大きいことからこの名があります。草本分科園で見ることができ、6月中旬から8月頃に白から薄紫色の花を咲かせます。



いずれの種も、湿った場所に生え、地際からすぐに葉を出して、葉の柄の断面には「雨どい」のようなくぼみ (右図の矢印部分) があります。おそらく葉の広い部分で集められた雨水は、雨どい形の柄を伝って地面に到達し、根元を潤しているのでしょう。いずれも名札 (ラベル) が付いています。裏面の地図を頼りに、ぜひ探してみてください。



今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。



3. 香りのある葉っぱ

植物園だより 2022 年度のシリーズ②③では、園内で見られる植物のなかでも葉っぱの特徴に注目して紹介していきます。今回は、香りのある葉っぱがテーマです。葉の香りには、葉を食べる虫をよせつけない効果や、細菌を殺す効果のある成分が含まれています。動くことのできない植物が外敵から身を守るための作戦の一つと考えられています。一方で、その香りは人にとって癒しや安らぎをもたらすハーブや香料、また薬草として人に広く利用されています。身近に利用される香りのある葉を 3 種紹介します。

① ハッカ (*Mentha canadensis* var. *piperascens*)

野原の湿ったところに生えるシソ科の多年草で、草丈は 20~60 cm。葉は長さ 2~8 cm で、表面には細かい毛が生えます。葉や茎には、清涼感のあるさわやかな香りのメントールを含み、虫などを寄せ付けない効果があります。薬草として知られるほか、チョコレートやアイスクリームの香り付けなどに幅広く利用されています。北方民族植物標本園で見ることができ、淡紫色の花が 8~10 月に咲きます。



② オオヨモギ (*Artemisia montana*)

山地の道端に生えるキク科の多年草で、草丈は 150~200 cm、葉は長さ 15~18 cm。本州に生えるヨモギより草丈、葉ともに大型になることからオオヨモギと呼ばれます。葉の裏面に毛が密生していて灰白色に見えます。お灸に使われるもぐさは、この裏毛を集めたもので、よく燃えることから「善燃草」の名付けられたという説があります。若葉を餅に加えてつき、草餅(よもぎ餅)として親しまれます。北方民族植物標本園と草本分科園で見ることができ、アイヌの人々は草全体から放たれる香りに邪気を払う力があるとして、病気の治療や呪術に用いたようです。



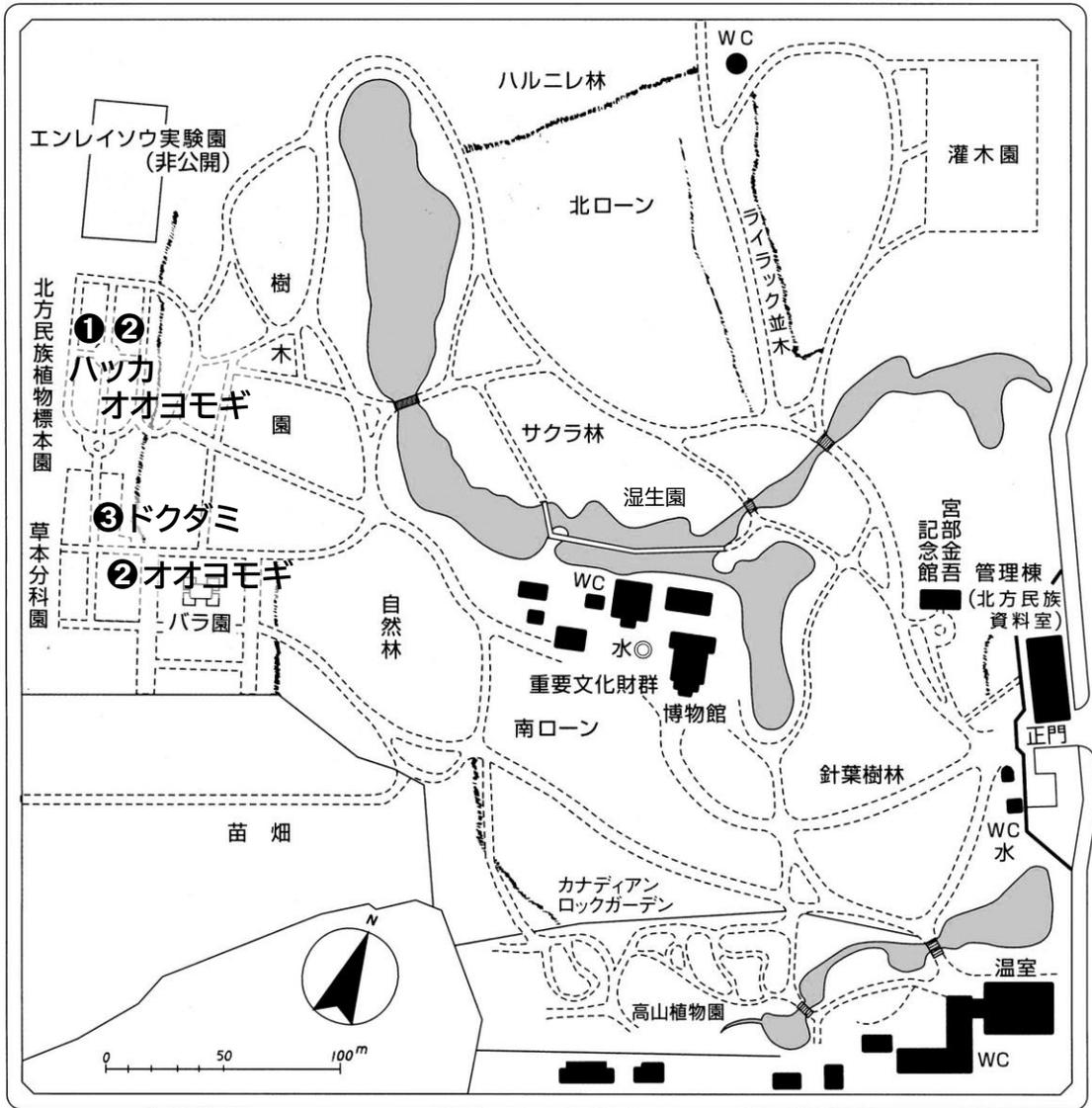
③ ドクダミ (*Houttuynia cordata*)

湿ったところに生えるドクダミ科の多年草で、草丈は 30~50 cm。葉はハート形で長さ約 5 cm、裏面は紫色をしています。草全体に独特の臭気があり、この臭い成分にはいくつかの菌を殺す効果があります。薬草としても様々な薬効が知られ、毒や痛みに効くので、名の由来は「毒痛み」や、毒を抑えることを意味する「毒をためる」が訛ったとする説があります。どくだみ茶やハーブとして、また加熱すると臭いが和らぐので野菜としても利用されます。草本分科園で見ることができます。



いずれも名札(ラベル)が付いています。裏面の地図を頼りに、ぜひ探してみてください。そして、それぞれの香りの違いを楽しんでみてはいかがでしょうか。

今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。



4. トゲのある葉っぱ

植物園だより 2022 年度のシリーズ②では、園内で見られる植物のなかでも葉っぱの特徴に注目して紹介していきます。今回は、トゲのある葉っぱがテーマです。葉や茎のトゲは、植物を食べる動物などから身を守るための防御手段の一つと考えられています。アウトドアなどで野山に入る際に、ぜひ覚えておきたいトゲのある葉を3種紹介します。

① エゾイラクサ (*Urtica platyphylla*)

やや湿った山地に生えるイラクサ科の多年草で、草丈は 50~180 cm、葉は長さ 8~16 cm。茎や葉に^{ぎさん}蟻酸を含むトゲが多数あり、触れると痛みを伴う^{ほっしん}発疹が出ます。名は北海道で見られるイラクサの意味で、イラクサは漢字で刺草または蕁麻と書きます。皮膚病の一つ「^{じんましん}蕁麻疹」は、この草に触れて起こる発疹症状に由来しています。とは言えトゲは若草の頃だけで、秋には柔らかくなるため、アイヌの人々は霜が降りる頃にこの草を刈り、内皮から繊維を取って縄を作るほか、糸にして布を織り衣服を作ったそうです。北方民族植物標本園で見ることができます。



エゾイラクサ

② チシマアザミ (*Cirsium kamschaticum*)

山野の草原に生えるキク科の多年草で、草丈は 1~2m、葉は長さ 17~35 cmで、葉や茎の縁には長短のトゲがあります。下部の葉ほど切れ込みは大きくなりますが、葉の切れ込みは個体差が大きく、まったく切れ込まないものもあります。北海道から北太平洋地域に分布することから別名はエゾアザミ。アザミは漢字で薊と書きます。「くさかんむり」に「魚」と「リ」(刀をあらわす)で、その文字からも、刀のようなトゲが魚の骨のように多数ある様子をあらわしていることがわかります。草本分科園で見ることができます。



チシマアザミ

③ コンフリー (*Symphytum x uplandicum*)

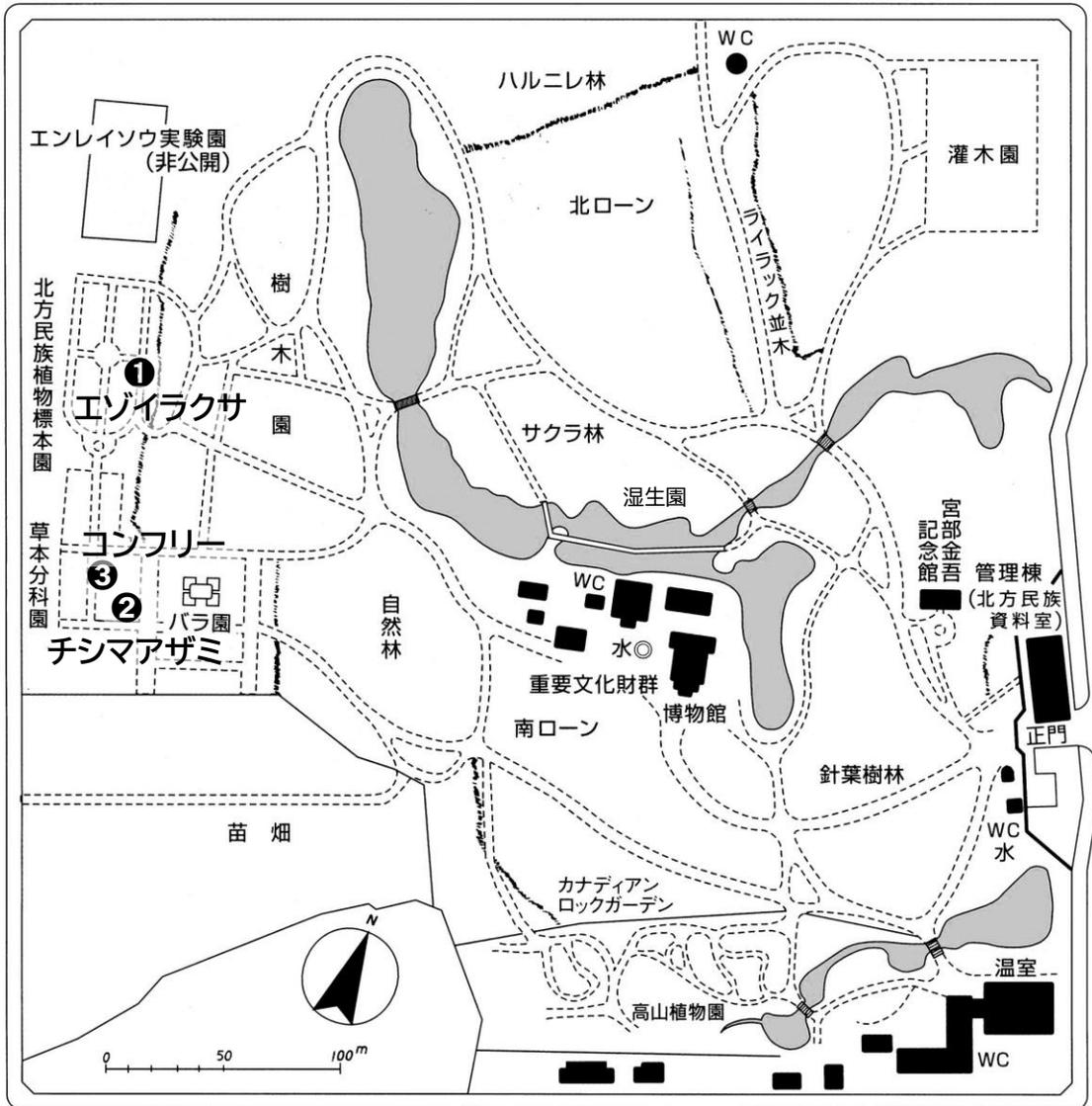
畑の近くなどに生えるムラサキ科の多年草で、草丈は 50~80 cm、葉は長さ 15~30 cmで、茎や葉に粗い毛が生えていて素手でさわるとチクチクします。ヨーロッパ原産の帰化植物で、明治時代に観賞用として持ち込まれました。昭和の中ごろには、健康食品として盛んに栽培され一部が野生化しましたが、現在は摂食することによって健康被害が生じるおそれがあるとして、厚生労働省が食品としての販売を禁止しています。草本分科園で見ることができます。



コンフリー

いずれも名札(ラベル)が付いています。裏面の地図を頼りに、ぜひ探してみてください。

今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。



5. 白っぽい葉っぱ

植物園だより 2022 年度のシリーズ②③では、園内で見られる植物のなかでも葉っぱの特徴に注目して紹介していきます。今回は、白っぽい葉っぱがテーマです。葉が白っぽい色に見えるのは、^{しまもよう}縞模様や^ふ斑が入るなど葉そのものの色によるものや、葉の色ではなく葉の表面をおおう毛やワックス(蠟)の色によるものがあります。園内で見られる白っぽい葉のうち、毛やワックスの色によって白く見える3種を紹介します。

① シロヨモギ (*Artemisia stelleriana*) ~ 白い綿毛が密生

日当たりの良い海岸の砂地で見られるキク科の多年草で、草丈は 20~60 cm、葉は厚く、長さ 3~9 cm。茎や葉が短い白色の綿毛が密生していることから、全体が白く見えます。茎が横^はに這うようにして伸び、8~10 月に小さく目立たない花が咲きます。名はヨモギに似て全体が雪のように白いことに由来しています。アサギリソウ、エゾノチチコグサ、ヤマハハコも同じく白い綿毛を密生するタイプで、いずれも草本分科園で見ることができます。



② プンゲンストウヒ “ホプシー” (*Picea pungens “Hopsii”*) ~ ワックスがおおう

プンゲンストウヒは、アメリカのコロラド州付近を原産地とするマツ科トウヒ属の樹木です。原産地にちなんでコロラドトウヒとも呼ばれ、高さ 10m ほどになります。銀白色の葉は、表面をおおうワックスの色によるものです。このワックスは風雨で落ちてしまうため、白い葉が最も美しい時期は新芽の頃の 6 月~7 月頃です。樹形も円錐形で観賞価値が高いことから、庭園の植栽やクリスマスツリーにも利用されます。プンゲンストウヒには多くの園芸品種があり、ホプシーは特に葉色が美しいとされる代表的な品種です。温室前の芝生で見ることができます。



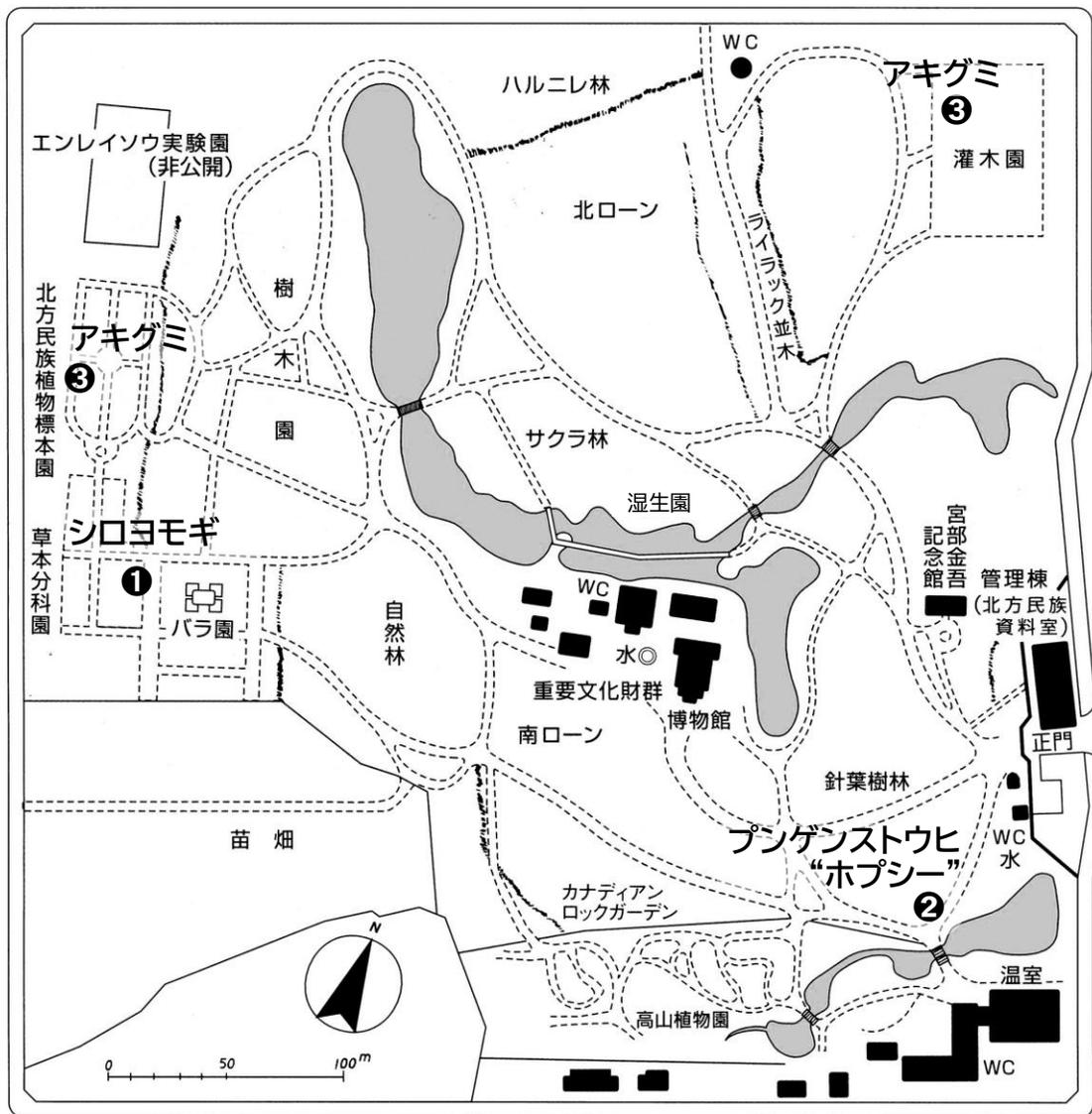
③ アキグミ (*Elaeagnus umbellata*) ~ 銀白色の鱗片^{りんぺん}が密生

明るい林の縁などに生えるグミ科の低木で、高さは 2~3m。長さ 4~8 cm の葉は、表面に銀白色の鱗片^{りんぺん}(うろこ状の薄い付属物)を密生しているため粉を吹いたように白く見えます。若い枝も灰白色の鱗片^{りんぺん}におおわれていますが、古くなると灰黒色に変わります。枝には短いトゲがまばらに生えます。名は秋に果実が熟すグミの意味で、5~6 月に黄色い花が咲きます。秋に赤く熟する果実にも鱗片^{りんぺん}があり、わずかにザラザラとした手触りがあります。北方民族植物標本園^{かんぼく}と灌木園で見ることができます。アイヌの人々は果実を食用にしたほか、枝を薬として利用していました。



いずれも名札(ラベル)が付いています。裏面の地図を参照して、ぜひ探してみてください。

今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。



6. 紅葉の美しい葉っぱ

植物園だより 2022 年度のシリーズ②では、園内で見られる植物のなかでも葉っぱの特徴に注目して紹介していきます。今回は、紅葉の美しい葉っぱがテーマです。夏までの樹木の葉には、黄色の色素(カロチノイド)と緑の色素(クロロフィル)が含まれており、緑の色素の量が多いため緑に見えます。秋になると、葉と枝の間に切れ目(離層)ができ、水や養分の行き来が止まります。同時に、寒さに弱い緑の色素が壊れて黄色の色素が目立つようになり、葉は黄色に見えるようになります。これがイチョウなどの黄葉のしくみです。さらに葉に残った養分に日光が当たって赤い色素(アントシアニン)が多く作られると、葉は赤や橙色に見えるようになります。これがモミジなどの紅葉のしくみです。園内で見られる黄葉・紅葉の美しい3種を紹介します。

① アラハダヒッコリー (*Carya ovata*)

北アメリカ原産のクルミ科の高木で、高さは 30mほどになります。羽のような形の葉は長さ 30~60 cm。漢字で「荒肌ヒッコリー」と書き、老木になると樹皮が剥がれやすいことによります。木材は堅く弾力性がある良材で、かつてはスキー板に、現在では野球のバットやドラムのスティックなどに利用されます。園内のサクラ林で見ることができ、10 月中旬から下旬に黄金色に色づきます。実は硬い殻におおわれていますが、リスは好んで食べ、この実を求めてエゾリス達が集まります。



② マルバノキ (*Disanthus cercidifolius*)

マンサク科の低木で高さ 3mほどになります。葉は長さ 5~11 cm、幅 4~10 cmで丸い形をしていることからこの名が付けました。星形をした暗赤色の花は紅葉とともに咲きますが、大きさは 7~8 mmと小さいため注意深く探さないと見落としてしまうほどです。本州と四国の山地に生育し、北海道にあるものは本園にあるものも含めて植えられたものです。灌木園で見ることができ、10 月中旬から下旬にかけて美しく紅葉します。



③ オオモミジ (*Acer amoenum*)

北海道から本州にかけての山地に生えるムクロジ科の高木で、高さ 12mほどになります。葉は長さ 7~11 cmで、手のひらのように切れ込み、縁には細かいギザギザがあります。北ローンの近くに数本まとめて植えられており、10 月中旬から下旬にかけて次々と橙色や赤に色づく様子は、本園の紅葉のクライマックスともいえるでしょう。

モミジの仲間には黄葉するものもあります。10 月中旬から下旬に黄色に色づくエゾイタヤ(*Acer pictum*)は、高さ 20mほど、葉は 5~15cmで、手のひらのように切れ込みますが縁にギザギザはありません。園内に数多く生育しており、自然林などで大木を見ることができます。



いずれも名札(ラベル)が付いていますので、裏面の地図を参照してぜひ探してみてください。なお、紅葉の時期はその年の気温や天候によって前後します。ご了承ください。

今回取り上げた葉っぱは、こちらでご覧いただけます。

